2021/9/19中野教会「聖書の学び」

聖書個所：サムエル記上8:1-8

**イスラエルにおける三権分立**

　聖書のお話とはしては少々奇妙なタイトルを付けました。そもそも「三権分立」という言葉はモンテスキューの『法の精神』において国家権力を立法権、執行権、裁判権の三つに区別したことに由来する、とのことです。通常、立法権・行政権・司法権と言われています。彼はフランス革命の前のルイ王朝の時代に絶対主義国家を批判するアプローチとしてこれを主張したようです。現実的影響力が最も大きい行政権を行使する機関をどう決定するかによって大統領制と議院内閣制が存在する、と言われます。近代法治国家はすべての国家機能は必ず法的根拠を持たねばならず、その法律を作るのは議会ですから三権のなかで基本的な支配権を持つのは議会である、ということになります。

しかし、現実は議会が行政権を行使する機関「内閣」の翼賛組織なってしまうことがよくあります。日本の現在の政治状況がまさにそうです。それは行政権と密接な関係をもつ利権集団を基礎にしている政党が議会を握っているからです。そして、また、実質的に内閣の長が最高裁判所の裁判官を指名することになってしまっていますから、司法権も行政権の下にある結果になります。結局、三権とも利権集団の政党である自民党の独裁と変わらないではないか、ということになります。中国の共産党独裁と実質的に何が違うのかよくわかりません。他の国の状況を見ても、結局、行政権が他の二権に対し実質的支配権を行使しています。三権分立というのは現実的には機能していないと思わされます。民主主義の危機の一側面です。

　国家が影響力をもつ領域は古代から現代に至るまでに強化されてきています。特に近代以降、そのスピードが速くなってきています。人間の生活領域を家族、中間団体、国家の三領域で考えます。氏族、部族、民族は家族に近い中間団体です。地方公共団体や各種行政機関は国家に近い中間団体です。その他、中間団体には宗教分野、教育分野、文化・芸術分野等多数あります。国家はその影響範囲を急速に拡大してきています。我々の大きな関心事である宗教と政治の関連でいえば、近代国家成立以降急速な勢いで、宗教の影響力の大きかった領域が国家に移行してきました。教育分野然り。福祉分野然り。果ては個人道徳の分野にまで国家の影響力が広がっています。この状況の中で三権分立が機能していない国家に影響力が吸収されるとどのような結果になるか、ということです。

　権力の分立のテーマはなにも近代以降に限られたことではありません。イスラエルの歴史を概観したとき、祭政一致、政教一致の時から、権力の分立のテーマが折に触れて出てきます。イスラエルにおける支配原理の特徴的なことは「主なる神」ヤハウェの一元的全面的支配にあります。もちろん、この通常イスラエルにおける一神教、として語られる理念はその成立に長時間を要していますが、それは、創世記・出エジプト記・民数記に凝縮されています。これらの文書のなかに、イスラエルにおける基本的な統治原理が示されている、ということです。最も基本的なことは「主なる神」ヤハウェの一神教ということです。この「主なる神」の意思・期待がどこにあるのかは、一見して明白、という訳にはいきません。なんらかの形で、人間を仲介者として人々に伝えられます。一個の人間や一個の組織がこの仲介者を独占すると大変なことになりかねません。いくつかの機能に分散することにより、仲介者が神に代わる者になるのを回避するというのは「神の知恵」というものでしょう。

　その一つの接近方法として宗教改革者カルヴァンの「イエス・キリストの三職」を見てみたいと思います。これはカルヴァンの主著『キリスト教綱要』の第二篇第15章に記されている考え方です。主イエスがキリストとして果たされた職務・役割は「預言者職・王職・祭司職」である、というものです。もっとも、そこで彼が述べていることは王権の霊的性格ということが主な点ですが。この主張は、旧約に於いて示されている「神の僕」としての三つの職務・役割を主イエスは統合している、という見方もできます。改革派の代表的信仰告白であるウェストミンスター信仰基準第8章「仲保者キリスト」の1で「神はその永遠のご計画で、ご自身のひとり子主イエスを、神と人との間の仲保者、預言者、祭司、王、神の教会のかしらまた救い主、万物の世嗣、世界の審判者に選びまた任ずることをよしとされた」と言われ、三職が明示されています。預言者機能の代表的なイメージはイザヤ、エレミヤの預言者として果たした役割です。王職の代表とされるのはダビデ、ソロモンです。祭司の代表的イメージはアロンとその系譜にある大祭司です。

時代によって、この三職の内のどれが最も支配的力であったのかは異なります。アブラハムから士師までの幕屋時代においてはこの三権・三職・三機能は未分化です。モーセの時にモーセが預言者、アロンが祭司という役割ができました。王はいません。主なる神が王である、ということです。注意を要するのは、アロンが預言者と呼ばれていることもある、ということです。出エジプト記7.01 で「主はモーセに仰せられた。「見よ。わたしはあなたをパロに対して神とし、あなたの兄アロンはあなたの預言者となる。」と言われています。祭司と預言者の兼務はありうる、ということです。士師の時代になると、士師は預言者と実質的に王の機能を果たします。祭司は祭儀の司式者としてアロンの系譜のレビ人がこれを担います。実質的な王権と言っているのは軍事的指導者としての機能と裁判権です。裁判権は宗教的権威をその裏付けとしています。政治権力は軍事権と裁判権です。但し、士師の軍事権は部族の軍事力のまとめ役の機能にとどまっていました。現代における行政機能の大部分は、当時は家族・部族がその機能を担っていました。

サムエルの時代が、大きな転機になります。サムエルは士師であり祭司です。従って、預言者、裁き人、祭司の三職を兼ねていました。軍事権は士師の時代の継続で部族にゆだねられていました。ここで、イスラエルの長老たちがサムエルに王を与えてください、と頼みます。サムエルの息子たちが「さばきつかさ」をしているが、どうしようもない人間なので、他の民族のように王を立ててください、というのです。預言者の後継者が期待した機能を果たせないから、と言うことです。主なる神は「警告を与えた上で民の希望を入れなさい」と答えます。これで指名されたのがイスラエルの初代の王サウルです。北イスラエルと南イスラエルの境のベニヤミン族の出身です。サウルは軍事的指導者としての機能を主に期待されていました。サウルの時に王の手足としての常備軍が形成され始めます。王職には軍事職と裁判職の二つがある、と考えますと、軍事職はサウルに渡されたが、裁判職はサムエルに残っていました。サムエルに宗教的権威は残されていたからです。軍事職がサウルに渡されたとは言っても、それは預言者職に従う限りでのことです。預言者職が軍事職を含む他の二職、王職、祭司職に対し、支配的力を持っています。

ダビデ、ソロモンの時代では逆に、王職が他の二職を支配下に置いているかの如くです。預言者も祭司も宮廷にお抱えとして存在し、王職に従うものとされたのです。しかし、預言者については、この宮廷預言者とは別に王から独立した預言者グループも存在しました。これが本来の預言者でありサムエルの伝統を継承する預言者です。第一サムエル記22.05に「そのころ、預言者ガドはダビデに言った。「この要害にとどまっていないで、さあ、ユダの地に帰りなさい。」そこでダビデは出て、ハレテの森へ行った」と言われガドが独立預言者として登場します。宮廷預言者より独立預言者の方が、権威がありました。独立預言者は自己鍛錬し、民の中に居て、尊敬される存在であったからです。のちに、預言者ナタンも出てきます。彼は、ダビデの罪、中でも有名なバテシバ事件におけるダビデの罪と、その呪いのダビデ王朝への波及を指摘した預言者として有名です。これから預言者と言えば独立預言者を指すようになります。しかし、注意すべきなのは、ダビデは直接主なる神に伺いを立てると言う預言者の役割も果たしている点であり、サムエル記著者によってそれは、当然のごとくに書かれています。第二サムエル記2.01 「この後、ダビデは主に伺って言った。「ユダの一つの町へ上って行くべきでしょうか。」すると主は彼に、「上って行け」と仰せられた。ダビデが、「どこへ上るのでしょうか」と聞くと、主は、「ヘブロンへ」と仰せられた」と記されています戦争の開始にあたって、神のみ旨を伺うのは預言者の最大の機能です。。詩編におけるダビデの詩（うた）は預言者の機能である主なる神の意志を伺うこと、願うこと、を直接行っています。ソロモンも同様です。第一列王記第8章のソロモンの祈りにも、主なる神への直接の祈りが記載されています。旧約偽典「ソロモンの詩編」にもソロモンの主なる神への祈りが記されています。イスラエルの初代の王サウルでは考えられないことです。もしそんなことをサウルがしたらサムエルに怒られていたことでしょう。とは言っても、独立預言者が伝統的な預言者職の機能を果たし、王職に対し批判的姿勢を貫いていたことは記憶しておくべきです。

祭司職については預言者のような独立祭司の明示はありません。アロンの息子エルアザルの系譜が正統的な祭司の家系です。エルアザルはモーセの指示の下、祭司職を忠実に努めます。ヨシュアのモーセの後継者としての任命に立ち会います。エルアザルの系統が士師の時代の祭司職を継承しますが、サムエルはエルアザルのイタマルの傍系につながるエリを祭司とします。エリはサムエルの下で忠実に祭司職を務めます。その子アヒトブ、アヒヤはサウルの下で祭司を務めますが、その子のアヒメレクはダビデを助けたためサウルに殺され、その子のアビヤタルはダビデ王を支持しますが、その子ソロモンの即位を支持せず追放されます。どうも、祭司は王の継承にかかわりを持っていましたが、この時期は、結局、王権の下にあったようです。ソロモンは傍系エリの祭司系列をやめ、本来のエルアザル系譜に戻りツァドクを祭司職に任命します。その子アヒマアツとともに王家に忠実な祭司としてツァドク以下の大祭司の系譜が続くことになります。以上から分かるようにダビデ、ソロモンの時代は祭司職の王職との間の緊張関係はなく、主従の関係に近かったと言えるでしょう。

王と祭司との関係について、王が祭司の役割を行うことを厳に戒めている箇所が聖書に若干存在することも記憶しておくべきです。まず、サウルがいけにえの祭儀を行うのにサムエルが来ないので民の声に押され自分でこの祭儀を行ったことがあります。サムエルは激怒し、なんと、これがサウルの王職剥奪の契機になってしまいました。第一サムエル記13.13 でサムエルは「今は、あなたの王国は立たない。主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。あなたが、主の命じられたことを守らなかったからだ。」と言っています。もう一か所はユダ王国第10代王ウジヤが祭壇で香をたくことをしました。祭司アザルヤが止めますが強引に実行しようとしたところウジヤが額にツァラアトを発症した、というものです。第二歴代26.19「ウジヤは激しく怒って、手に香炉を取って香をたこうとした。彼が祭司たちに対して激しい怒りをいだいたとき、その祭司たちの前、主の神殿の中、香の壇のかたわらで、突然、彼の額にツァラアトが現れた」と言われています。

更に時代が下り、ハスモン王朝の時代に第3代のヨナタンが王の肩書に加え「大祭司」の肩書も得ました。これに対し、保守派のユダヤ人たちは強い批判をしたと言われています。死海写本で有名なクムラン教団は彼を「悪の教師」と呼んでいた、と推測されています。これは、大祭司はツァドク家の血筋から出るべきなのにハスモン家という田舎祭司の出身者が大祭司になることはできない、という教理的理由に加え、王が宗教的権威の頂点に立つことへの反発があったと考えられます。ハスモン王朝では王による大祭司兼務がしばらく続きますが、ヘロデ大王が大祭司をツァドク家の系譜に戻しました。主イエスの時代にはローマ総督の支配下にあったため王は存在せず、ツァドク家の系譜のカヤパ、アンナスという大祭司がユダヤ民族の最高指導者でした。

祭司についてはもう一点申し上げておくべきことがあります。ソロモンのあとイスラエル王国は南北に分裂しますが後のユダヤ教においては南王国が正統的信仰の継承者とされました。そのユダ王国では何度か宗教改革が行われ、主なる神ヤハウェの一神教信仰が確立していきました。それは国家祭儀としてのユダヤ教ですがエルサレム神殿への祭儀の集中を伴っていました。北王国が滅んだ後のユダ王国第16代王ヨシヤは国家祭儀のエルサレム祭壇への集中とともに祭司のエルサレムへの集中を行おうとしました。そんなこと無理に決まっています。祭司の集中は不徹底になり、多くの地方祭司が存続しました。この結果、大祭司をはじめとするエルサレム神殿の祭司団と多数の地方祭司という、祭司の分裂状況が生まれたのです。地方祭司はエルサレム神殿の祭司団を快く思わないのは当然です。王権と結びついた神殿祭司と王権に批判的な地方祭司という関係が出来上がっていきました。ホセア、ヨエル、アモス等の預言者たちはこの地方祭司の血筋から出ています。エレミヤの場合はアロンの傍系祭司エリの血筋です。エリの系譜の最後に大祭司アビヤタルがソロモンによって罷免・追放されたのがアナトテの地であり、此処からエレミヤは預言者として立つことになります。エレミヤはユダ王国の王権に対し強烈な批判を展開いたします。エレミヤはイザヤのように宮廷預言者から独立預言者になったと推測される人物ではなく、初めから徹底した独立預言者です。王権と預言者職の緊張関係はエレミヤに至って最大のものとなっています。なお、祭司職と預言者職は相互互換的であり、兼務にも全く問題はありませんでした。

南北朝時代を見てみます。北王国の血統による王権の継承である王朝は長く続きません。オムリ王朝で4代、エフー王朝で5代です。多くはクーデタによる王交替です。これは一種の「カリスマによる王」指名と言えます。この王交替の背後で大祭司が暗躍していると想像される場面がしばしばあります。南王国ではダビデ王朝が最後まで継続しますが、血による王継承が維持されたにしても時々クーデタによる王交替が発生しています。その時、大祭司が重要な役割を果たしていると考えられる場面もあります。大祭司はエルサレム神殿の祭司の取りまとめ役です。宮廷預言者も事実上、大祭司の配下にあったと推測されます。従って、この南北朝時代は実質的に大祭司の力が強まっていく時代であった、と考えられます。国民的信頼を勝ち得ていたサムエルのような預言者が王を指名する、というような状況でもない限り王が独裁的権限を行使することなどできません。実質的には大祭司を長とするAdivisaryBoardがものごとを決める、という体制になっていきます。血による王位継承のユダ王国でもヨアシュ、ヨシヤのようにそれぞれ、7歳、8歳のような幼少で王になった場合は成人し一人前の王として機能し始めるまではこの助言者集団が実質上の決定機関になることは当然です。王職としての独自判断はあまりなかったのではないか、と推測します。

この大祭司を長とする宮廷貴族に対抗できるのは、地方祭司を支持者とする独立預言者だけです。この時代には、多くの独立預言者が聖書に登場致します。イスラエル信仰の継承者はこの独立預言者です。先見者という称号の場合もあります。預言者アヒア、先見者ハナニ、大預言者エリヤ、その弟子エリシャ、ミカヤ、ヨナ書のヨナ、大預言者イザヤ、女預言者フルダ、「神の人」シュマヤ、先見者イド、預言者オデデ、大預言者エレミヤ等です。ホセア書以下の13小預言書の預言者のほとんどもこの時代です。ヨエル、ホセア、アモス、ミカ、ナホム、ゼパニヤ、ハバクク、オバデヤ、そして大預言者エゼキエル、ダニエルです。これら独立預言者は南北王朝の政治・軍事にはほとんど影響を与えることはできませんでした。しかし、主なる神への全面的信頼に基礎を置く「神の国」到来の希望を継承していきました。王族や貴族階層はその時に勢力を持っている超大国に追随する以上の戦術はとりえなかった、というのが現実でした。ユダヤ民族主義の動きが出始めるとこれら超大国につぶされ、最後は国を失うことになります。

この南北朝時代に形成されたと考えられる王の助言者集団はながく続いていきます。この助言者のことを「長老」と呼んでいる箇所もあります。そもそもはモーセが集めた70人の長老の話に由来する、と言われています。捕囚からの帰還後、この組織がペルシャ支配下での自治機関としてつくられ、アレキサンダー大王の後のヘレニズム時代には長老会議（ギリシャ語でゲルーシア）となっていきます。この構成員は特権が認められた貴族階級です。この長老会議はハスモン王朝の時代には王室顧問団となり、ハスモン王朝最盛期の王ヨハネ・ヒルカノスの時に、法律制定にも関与する大法廷「サンヘドリン」となりました、ました。法律制定については王の同意を必要とするのは当然であろうと思いますが裁判権についてはサンヘドリンが最終でした。国会であり、最高裁でした。この顧問団、長老会、サンヘドリンの長となったのが大祭司です。外国支配で王が存在しない時にはこの自治機関が国家機能をすべて果たすことになります。この「議会ごときもの」はイスラエル以外でも広く見られます。王制を採っている国の統治機構の一部になります。これが拡大されていくと議会となりますが、他方で王への助言機関が別途作られます。日本の場合でいえば枢密院というのがそれです。

最後にもう一点述べておきたいことがあります。独立預言者が生み出した外国支配に関する独自の理解です。士師記以降の申命記史書に示されている基本的考え方は、イスラエルの偶像礼拝等の重大な罪が主なる神の罰である外国人支配をイスラエルに齎し、イスラエルが悔い改めると主なる神はこれを赦し、この支配国家に罰を下す、という考え方です。ここには「外国支配」＝「罪への罰」という考えがあります。これは主なる神がなぜこのような苦難を、選ばれた民イスラエルに下すのか、という疑問のところでディレンマに陥ります。独立預言者は、これに対し、この支配する国家は神の僕としてイスラエルに苦難を与え、これによりイスラエルは忍耐力を涵養し、来るべき神の国への希望の下で助け合う「愛」で結ばれた民族を作るのだ、という考え方を採ります。この支配国家が宗教的寛容性をどの程度持つかはその帝国主義性によって異なります。ペルシャが最も寛容、次が歴代のエジプト、ローマ帝政、そして新バビロニア、セレウコス朝シリヤというような順序でしょうか。独立預言者就中エレミヤにはいかなる帝国主義的支配があっても主なる神への信仰の基本は守ることが可能であるという信念があるように見受けられます。これは軍事的・政治的・経済的支配の下にあっても宗教的自立性を保つ余地が残されていることは十分ありうるのだ、という理解が背後にはあります。更には、たとえ、死ぬようなことになってもイスラエル信仰共同体のなかで生き続けることができる、という固い信仰があります。死後の世界に賭けているのではなく、信仰共同体の継続性に賭けているのです。それは主なる神がこの地上での歴史も究極的には完全なる支配権を有している、と信じているからです。

こうみていくと、預言者職、王職、祭司職の三職の関係はイスラエルの歴史に於いて変遷をたどってきています。三権分立とは言っても実質的にはこの三職の力の程度は時代、時代で異なっています。しかし、この三職が完全に一元化されかつ実効性を持っていた、と考えられるのはモーセの短期間だけのように思います。その意味では旧約の時代を通じてこの三職は連携したり反発したりで歴史は彩られています。没宗教的な近代社会の三権分立よりずっと、現実の歴史を良く説明できます。世界の歴史をこの三職の相克としてみてみるのも面白いかもしれません。主イエスの三職の統合も王職については霊的理解をしなければならない、とカルヴァンはいわば留保条件を付けています。終末の時において、王職が完全な形で姿を示し、三職統合の完成が具体的に示される、ということだと思います。

現代の問題、イスラム世界の統治形態は旧約におけるイスラエルの統治形態と類似しています。カリフ制、スルタン制が預言者的伝統を継承した祭政一致の統治形態です。また、ホメイニ革命後のイランはシーア派ですが、預言者マホメットの代理人が最高指導者となっています。これは、サムエル時代の預言者のイメージに類似しています。預言者、祭司、王の三職の組み合わせ、という見地から、イスラム原理主義者の言うことを見ると、興味深い点が多いと思います。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日は、イスラエルの歴史に於ける三職の相克を見ました。神に代わろうとする支配者が現れることは歴史の必然のようにも見えます。聖書は、そのようなことがないよう、権力の分立を勧めている、と読むことができます。人間による人間の支配を回避するための「神の知恵」と、思います。武力・暴力による支配はこの知恵を破壊するものです。「平和の主」の弟子として、私たちキリスト者が主イエスの教えに従って生きていくことができるよう、導きをお与えください。主イエス・キリストの御名により祈ります。アーメン）